

御言葉は、文脈や歴史背景をしっかりと積義して意味が現れることもあれば、ただひと言をじっくり味わっているうちに、あっこれか、と感じられる場合もある。今日の箇所はその中間だろうか。

ほんの3節の間を行きつ戻りつしていると、ぼんやり何かが見えて来る。そこから掘ってみようか。

「古い人(コサイ 3:9)／新しい人(3:10)」という対比、あるいは「脱ぎ捨てる(3:9)／身に着ける(3:10)」という対比は、何かを言わんとしている所だろう。そして結論は、「キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられる(3:11)」にまで達する。そのつもりで、もう少し掘り進めてみようか。

「新しい人を身に着け(3:10)」の「新しい」とは通常で、古い人から新しい人へ移行するニュアンス。そのために新しい人も、やがて古い人になってしまう。ところがそれに続く「日々新たにされて(3:10)」の「新たに」は、語幹が異なる別の言葉で、たっぷり湧き出でる泉のようにいつも「新鮮であり続ける」という風変わりな言い回し。すなわち「真の知識に達する(3:10)」ことはどうやら、時間の水平的な更新ではなく、別次元への垂直的な上昇を語ろうとしているのだろう(3:1)。

「古い人をその行いと共に脱ぎ捨てる(3:9)」。古い人にとっての「救済条件」は教えの遵法という「行い」、だから脱ぎ捨てる。それでは「造り主の姿に倣う新しい人を身に着け(3:10)」はどうか。自由な新しい人にはなりたいが、いくら何でも造り主の姿に倣うとは、おこがましいんじゃないか。

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された(創世 1:27)」。人を「男と女に創造された」と簡素に語るが、いわゆる LGBT その他の性も神にかたどられた創造だとすれば、原形たる「御自分(神)」は、人間以上に多様な性をお持ちの方であろう。そう思うと、神がぐっと親しくなって来る。

そんな「造り主の姿に倣う新しい人を身に着ける(コサイ 3:10)」のであれば、責任は重いがときめきは増す。積極的に未知なる「新しい人」を身に着けてみたい。

「脱ぎ捨てる(3:9)」と「身に着ける(3:10)」では、普通「脱いでから着る」であろう。新しさを先に着てしまったら、古さを脱ぐことができないからだ。しかしこの順序は逆じゃないのか。まず「新しい人を身に着ける」こと。

「あなたがたはキリストと共に復活させられたのだから、上にあるものを求めなさい(3:1)」。私たちはすでにキリストと共に「死んだのであって、キリストと共に神の内に隠されている(3:3)」。「新しい人を身に着けている」のだから、古い人を脱ぎ捨てるばかりだ。

馴染んだ「古い人の行い(3:9)」には執着がある。しかしそれは「私」ではなく硬直した世の習いに過ぎない。真の私はおそろしく多様な「造り主の姿に倣う新しい人(3:10)」に他ならない。

すでに「キリストと共に復活させられ(3:1)」、古い人の内側にあつて「日々新たにされる(3:10)」私なのだ。

「互いにくそをついてはならぬ(3:9)」。嘘は、復活によって「日々新たにされている」私を、古い人に引き戻そうとする罪の力。私たちはキリストと共に復活させられている(3:1)。

未開人のように粗末でも、ブラック企業で奴隷のようにされても(3:11)、この瞬間古い人を脱ぎ捨てて、神の創造によるおそろしく多様な「新鮮であり続ける」私を自覚する。この私に「キリストがおられる(3:11)」と。



《おまけのひとこと》

神は見えない 形を刻めば虚像 神は「御自分にかたどって人を創造された(創世 1:27)」ので人から類推できる では人とは誰か イエスを含めた世の人すべて その多様性ゆえに見極められない